

2015年3月22日川越教会

十字架がもたらす命

加藤 享

【聖書】マルコによる福音書 15章 25～39節

イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。またイエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。(†底本に節が欠落 異本訳) こうして、「その人は犯罪人の一人に数えられた」という聖書の言葉が実現した。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

【序】十字架の救い

私たちはイエス・キリストを救い主と信じる信仰を持ち、このように日曜日毎に礼拝を守っています。イエス・キリストはユダヤ人が一番大切に守っている**過越しの祭り**の間の金曜日、朝9時に**十字架**にはりつけられ、午後3時に息を引き取られました。そして墓に葬られましたが、続く日曜日の朝に墓の中から**復活**して、弟子たちにご自身を現されました。

過越しの祭りは、太陽暦では春分後の満月をはさむ一週間に守られています。今年は3月29日の日曜から始まり、4月3日の金曜日が十字架の記念日となり、5日とその復活をお祝いする復活祭イースターです。しかし来週29日には朝霞

教会の江川牧師をお招きしていますので、一週間前の今日、**主イエスの十字架の死**を学び直すことにいたしました。

〔1〕十字架の死

主イエスは、弟子たちの信仰が深まり「あなたは**メシア、生ける神の子**です」と言えるようになると、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから**多くの苦しみを受けて殺される**が、三日目に**復活**することを、弟子たちに繰り返し予告されるようになりました。ペトロはあわててわきへお連れして、「主よ、とんでもないことです。**そんなことがあってはなりません**」といさめて「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの**邪魔をする者だ**」（マタイ 16：23）と叱られています。ユダヤ教の指導者たちによって**殺されてしまう救い主**とは、一体どういうことなのでしょう？弟子たちの**驚きと当惑**は当然のことです。

主イエスは、過越しの祭が始まる日曜日にエルサレムに到着されました。弟子の一人ユダの動揺が激しくなっていました。そして遂に祭司長たちのところへ行き、主を引き渡す機会を打合せしてしまいます。**木曜日の夜**、弟子たちと最後の晩餐をとられた後で、主はゲッセマネの庭に出かけて行き、**深い悲しみにもだえながら**、長い祈りをされました。「父よ、出来ることなら**この杯をわたしから過ぎ去らせてください**。しかしわたしの願い通りではなく、**御心のま**まに」（マタイ 26：39）

ユダに手引きされた大祭司の手下や群衆が、剣や棒を持って襲いかかりました。ペトロは剣を振るって応戦し、手下の一人の片方の耳を切り落とします。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆剣で滅びる。わたしが父にお願いすれば、天使の大軍を直ぐに送ってくださる。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている**聖書の言葉は**どうして**実現されようか**」（マタイ 26：62）

これは旧約聖書イザヤ書 53 章に預言されている**苦難の僕**のことでしょう。私たちは先程、交読文と一緒に朗読しました。**人々の罪をすべて背負い**、口を開かず、**執り成しの死を遂げていく僕**の道を、主イエスご自身が歩もうとされていることを現しています。しかし、戦わず無抵抗に逮捕されていかれる主の態度に、主を守ろうといきり立っていた弟子たちの心はくじけてしまい、主を見捨てて皆**逃げ散って**しまいました。

真夜中にもかかわらず、大祭司の官邸で直ちに最高法院の裁判が開かれまし

た。主はイザヤ書の預言通りに口を開きません。大祭司はたまりかねて立ち上がり、「生ける神に誓って我々に答よ。お前は神の子メシアか」「あなたたちはやがて、**人の子が全能の神の右に座り**、天の雲に乗って来るのを見る」大祭司は服を引き裂きながら言いました。「神を冒瀆した。諸君はどう思うか」「死刑にすべきだ」(マタイ 26:66)そして主イエスの顔に**唾を吐きかけ**、こぶしで**殴りつけ**、或る者は**平手打ち**をしました。

夜が明けると彼らは主を縛ってローマ総督ピラトのもとに連れて行きました。しかし祭司長たちの不利な訴えにもかかわらず、総督が非常に不思議に思うほど、主は沈黙を通されます。祭司長たちは群衆を扇動して「イエスを十字架につけろ」を叫ばせました。群衆の興奮が募って**暴動**が起こりそうな事態になり、ピラトも遂に十字架刑を許可します。(マタイ 27:26)

総督の兵士たちは、部隊全員で主イエスを取り囲み、着ている物を剥ぎ取り、古びた赤マントを着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、右手に葦の棒を持たせ、その前にひざまずき、「**ユダヤ人の王、万歳**」と言って**侮辱**しました。また**唾を吐きかけ**、葦の棒で**頭を叩き続け**ました。こうした侮辱のあげく元の服を着せ、十字架を担がせてゴルゴタの丘にひき立てて行きました。しかし主イエスは、前の晩に夕食後遅くまで祈り続け、逮捕されると明け方まで大祭司の法廷に立たされ、そして夜明けと共にピラトのもとに引き立てられて来て裁判を受けたのです。**衰弱しきっていてご自分の十字架を担いきれません**。道端で見物していたキレネ人シモンが引っ張り出されて、担がされました。(27:32)

太い釘で両手の手首を十字架に打ち付けられました。**午前9時**です。(マルコ 15:25) 通りかかった人々が、頭を振りながら**ののし**りました。「神殿を打ち倒し三日で建てる者、神の子なら**自分を救ってみろ**。そして十字架から降りて来い」同じように祭司長、律法学者、長老たちも一緒になって主イエスを**侮辱**して言いました。「他人を救ったのに**自分を救えない**。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう。神に頼っているが、**神の御心なら、今すぐ救ってもらえ**。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから」一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じように主イエスを**ののし**りました。(27:44)

昼の12時に**全地が暗くなり**、3時まで続きました。**午後3時頃**、主は大声で叫ばれました。「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」そして息を引き取られました。こうして太陽も姿を消し、全地が暗くなった中で、人々

からだけでなく、父なる神さまからも見捨てられて、**惨めさの極み・絶望的な死**を遂げられたのでした。

〔2〕死の孤独

人は皆死にます。死だけは誰も避けることが出来ません。しかも自分がどのように死んでいくのか、また死んだらそれからどうなるのでしょうか。自分で死を味わってみるまでは分からないのです。私たちは、自分の**死の実体、真相**が分からぬままに死に臨んでいきます。知らないで死んでいく方が気楽に死ねると言う人もいますが、**気楽な死**の保障が果たしてあるのでしょうか。静かに息を引き取ったと見えても、本人の心の中は他の誰にも分かりません。

「**主イエスほど死を恐れた人はいない**」と宗教改革者マルチン・ルターは言っています。そうです。主イエスは弟子たちと最後の晩餐をとられた後で、いよいよ逮捕される直前に、ゲッセマネの園で長い祈りの時をお持ちになりました。主イエスは**悲しみもだえ**始めて弟子たちに言われました。「私は**死ぬばかりに悲しい**。ここを離れず、私と共に目を覚ましていなさい」 ご自分の苦難の死を繰り返し予告してこられた主です。死ぬ覚悟は十分に出来ておられたはずなのに、悲しみと恐れと苦しみに**悶えて**おられます。どうしてでしょうか？

私たちは幼い時に、嘘をつく人間は死んでから地獄で閻魔大王に舌を切り取られるとおどされて育ちました。しかし主イエスほど神を敬い、人を愛する生涯を送って来られた方はいません。誰よりも**天国が保障されている**お方ではないでしょうか。釈迦や孔子以上に**平安な大往生**を遂げられるお方ではないでしょうか。それが死を間近かにして、**死の恐れ**に激しく襲われておられるのです。しかしここにこそまさに、**主イエスが救い主キリストである**こと、同時に私たちが見過ごしている**死の真の姿**が明らかにされているのです。

聖書は「初めに、神は天地を創造された」という宣言から始まります。神さまから創られた最初の夫婦**アダムとエバ**は、**死のない楽園**に暮らしていました。しかし神さまの言葉を見捨て、**善悪を判断する木の実**を勝手に食べてしまいました。自分の判断で思うままに行動しようとし始めたのです。私たちが世界の創造主である**神の言葉(楽園のルール)**を見捨て、各自が勝手気ままに行動すれば、他の人との間に**衝突と争い**が生じるのは当然です。この**罪**の故に**平和な楽園は失われてしまいました**。そしてアダムとエバ夫婦の家庭で、兄が弟を殺すという最初の**悲劇**が起こりました。

神を捨てた家庭に、**罪**と**罪の結果である死**がもたらされたのです。神を捨てることで神と断絶し、神から捨てられて死がもたらされた——すなわち私たち人間は、**神を捨てて罪を犯し、神に捨てられて死を招いた**と申せましょう。

いじめで、子どもたちが自殺に追いやられます。川崎の中1殺害事件も、親や大人とのかかわりを自分から断ち切った少年仲間が発生しました。ひどいいじめにあっても仲間外れにされることを恐れ、その仲間によって殺されてしまいました。大人でも家族・友人・世間から見捨てられて孤独と絶望に陥り、身を滅ぼします。**見捨てられることは死ぬほど辛く、恐ろしいこと**なのです。

しかし親密な愛の絆に恵まれた生涯を送って来れたとしても、私たちは皆死ぬ時は一人になって死んでいくのです。人との絆を引き裂かれる淋しき、悲しみはどれほど深いものでしょうか。**死は私たちが全く孤独にするのです**。全てから引き裂かれて死んでいく——これが**死の姿**なのです。

十字架の上で、イエス・キリストは**全く孤独**でした。誰一人助けしてくれません。「キリストなら今十字架から降りて、その力を現してみよ。そしたら信じてやろう」と嘲られました。水戸黄門ならここで葵の紋章を示して「静まれ、静まれ」と叫ぶ家来が現れます。しかし十字架では、**神さまも沈黙して助けの手を差し伸べて下さ**いませんでした。どうしてでしょうか？

それは主イエスが、私たち**人間の罪とその罪がもたらす死を、わが身に引き受けて下さった**からにほかなりません。神を捨てて罪を犯し、その報いとして死がもたらされるといふ私たち人間の姿を、神がイエス・キリストにおいてはっきりと**お現わしになった**からです。

こうして**神**がご自分を現すために、**人間**となられて、この世に来られた**イエス・キリスト**が、その死に於いても、一人の人間として、**死の真相を現しつつ死なれた**のでした。すなわち私たち人間にとって、**死は見捨てられること**、それ故に人を**全く孤独にするもの**であること、すなわち**見捨てられる死の真相**を、**キリストご自身**が身をもって明らかにされたのでした。

しかし、もう一つ大切なことがあります。それは主イエスが、神にも見捨てられたと思える**絶望的な死の最中**にあってもなお「**わが神、わが神、なぜわたしを？**」と、神さまに向かって叫んでおられる姿です。主イエスは**死の最中**に於いてもなお、神さまを見失わず、**神さまを身近に覚え続けて居られた**のです。そして神さまは**十字**

架の上でも主イエスと共に居られたのです。

主イエスの十字架刑を執行して、その死に様を始めから終りまで見つめていたローマ兵の隊長が、息を引き取られた主イエスの姿を目の当たりして、思わず声を出してつぶやきました。「**本当に、この人は神の子だった**」 不思議ですね。信仰とは全く縁がないと思われる百人隊長です。その場を支配していた**神の霊が働いて**彼を感動させたとしか考えられません。そうです。ですからその場に臨んで居られる神さまが、**主の叫びに答えて下さいました**。それが三日後の**復活**です。

【結】 何時も共に在す神

主イエスの残酷な十字架の死に於いて、私たちは人間が味わう**厳しい死の姿**と、その死を御子イエスに負わせて、私たちの**罪を贖ってくださった神の愛**を示されました。死の叫びに、墓の中からの**復活をもって**応えて下さる**神の愛**を示されました。罪のゆえに孤立と絶望に落ち込んでも、**そこに**私たちの叫びを聞いて応えて下さる**愛の神さまが居て下さる**のです。

私たちも「**わが神、わが神、なぜですか？**」と問いかけることの出来る父なる神と向かい合って、主イエスと共に生きて参りましょう。私たちは、**孤独な生と死の道**を歩んでいるのではないのです。十字架の死を通して、罪を赦し清めて、神と共に生きる新しい復活の命を与えて下さる愛の神が、私と共にいて下さることが示されました。その恵みを信じて、主イエスと共に生きて参りましょう。

祈ります。

父なる神さま、御子イエス・キリストの十字架の死の苦しみを、改めて学び返しました。神の御子をこのような残酷な死へ追いやった大祭司はじめ宗教家たち、総督や兵隊、群衆の罪深さに、強い怒りを覚えます。逃げ散ってしまう弟子たちの信仰の弱さに、胸が痛みます。そして自分もまた主イエスを十字架にはりつけにする罪深い一人であることを、自覚させられます。でも主は私の罪をも引き受けて、罪の裁きとしての十字架の苦しみと死を受けて下さいました。感謝します。神にも見捨てられたと叫ぶ孤独のどん底に立ちながら、なお神に祈り、死よりの救いをいただく信仰の恵みを現して下さった救い主に感謝します。どのような時、どのような所にも、神さま、貴方が私と共に居て下さることを信じて祈りつつ、主イエスを仰ぎみて、生きていく者にして下さい。どんな人にも、愛をもって仕えつつ、共に生きる者にして下さい。

救い主イエスキリストの御名によってお祈りします。 アーメン